

書き下ろし文芸マガジン

NONSTOP

vol.5-2 終わりの予感

☆「クローバー」

入江棗

☆「平行線シンドローム」

水島朱音

☆「やろうぜ！」

土本強

企画・監修 榎本秋

株式会社榎本事務所



書き下ろし文芸マガジン

NONSTOP

vol.5-2 終わりの予感

☆「クローバー」

入江棗

☆「平行線シンドローム」

水島朱音

☆「やろうぜ！」

土本強

企画・監修 榎本秋

株式会社榎本事務所

書き下ろし&読みきり文芸マガジン「NONSTOP」の第5-2号をお届けする。今回掲載した三作品と前回の第5-1号に掲載した四作品をあわせて楽しんでいただければ幸いだ。本マガジンは二つの全体的なテーマを設定している。ひとつは、北陸地方の海沿いをイメージした架空の地方都市「N市」を共通の舞台としたシェアードワールドノベルズであること。そしてもうひとつは、「青春」をテーマとすることだ。これに加えて、毎号の統一テーマも設定した。今回の表テーマは「終わりの予感」、裏テーマは「冬」というのは第5-1号に同じである。

このような事情から、先行する弊社事務所発行の電子マガジン「signal」掲載の諸作品と比べ、本マガジンに掲載している作品は続き物としての性質が強めになっている。それでもなるべくどこから読んでも楽しめるようにはなっているが、できれば第一号より順繰りに追いかけていっていただきたい。損はさせない出来のつもりである。

本マガジンには、私、榎本秋と関係ある作家および作家の卵たち、計七名が参加している。さらに、普段から榎本事務所制作の本でお世話になっているアミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイナー学科の全面協力を得て、毎月イラストコンペを開催していただき、その上位作品を表紙あるいは口絵として収録するという試みもさせていただいている。作品ごとのイラストについては、これとは別に創刊時にコンペを行って選ばせていただいた。

本誌をひとつの踏み切り板としてに各参加作家、イラストレーターが新たな展開を手にすることを願ってやまない。それでは、楽しんでいただけると幸いである。感想やご意見など、コメント機能などご利用の上でいただけると大変うれしい。

榎本秋

目次

はじめに	2
目次	3
舞台設定	6
へタイトルをクリックで該当のページに飛びます	
クローバー	5
イラスト	伊藤由希
やろうぜ!	土本強
イラスト	U35
平行線シンδροーム	水島朱音
イラスト	正午あきら
鑑賞	92

舞台：N市

☆海に面した盆地上の小都市

○海→山でいきなり切り立っており、海に面していない周りは山で囲まれてる

☆高速道路開通の賛成・反対でもめている

○大きな都市（県庁所在地）と都市を繋げるための道路で、市の活性化を見込んでいる

☆市内に男子校（昇星学院）、女子校（優華女学院）、共学がそれぞれ存在する

☆駅前大きめのショッピングモールができたばかり

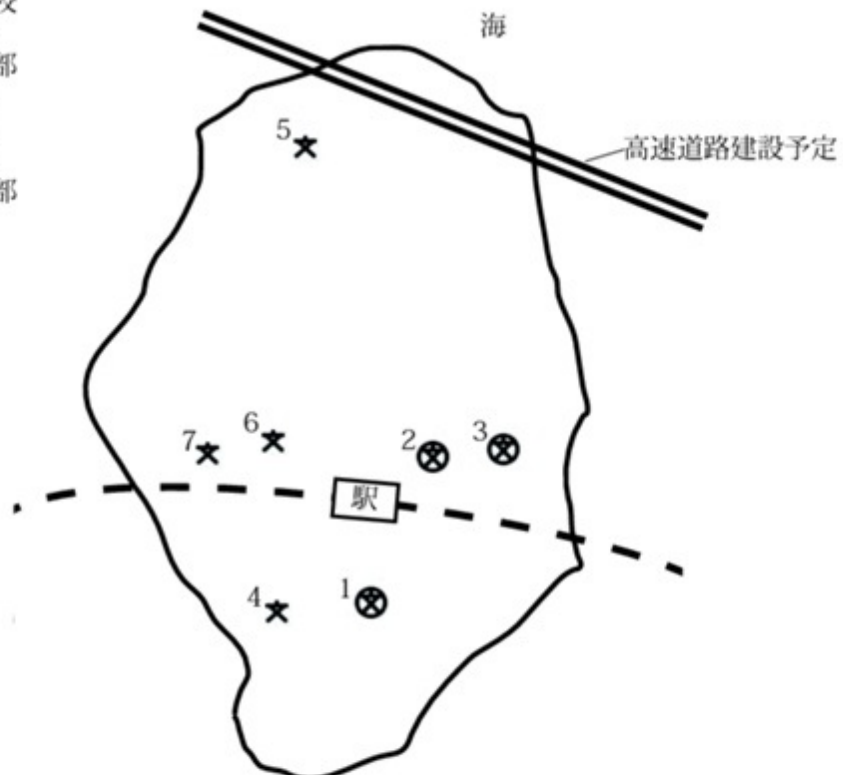
☆地主＝旧家がある

○「塚本家」という地主が存在する

○本家・分家があり市内に家が散らばっている

○高速道路問題では一族で揉めている

- 1 → 市立中央高等学校
- 2 → 昇星学院高等部
- 3 → 優華女学院高等部
- 4 → 市立第一中学校
- 5 → 市立第二中学校
- 6 → 昇星学院中等部
- 7 → 優華女学院中等部





クロバー

Illustration: 伊藤由希

入江棗

あらすじ

千伽・楓・孝士の三人は夏休みに東京へ遊びに行き、そこで千伽は楓が卒業後東京へ行くことを知る。自分の進路がころもとなない千伽は、三人のこれからの形に不安を覚え始めていた。

佐々口孝士



中学三年生。千伽の幼馴染。千伽のことをよく気にかける。

高橋千伽



中学三年生。本屋の娘。本が好きで大人しい性格。

塚本楓



中学三年生。地主の分家の次男。一匹狼で少しわがまま。

第五話 粉雪とめばえ

日本のどこかで初雪が観測されたとニュースで流れた数日後、N市にも細かな雪が舞った。これはほんの序の口。東北地方ほどではないけれど、この地域も毎年そこその雪が降る。おかげで自転車に乗れず、徒歩で通学することが増えてしまう季節だ。

今日も朝からみぞれが降っていた。今週に入ってからずっと天気がぐずついている。悪天候はまだもう少し続くみたいで、当分は毎日雪が拝めそうだと予報されていた。

「塚本、は今日も休みか」

塚本くんが学校をお休みするのはこれで三日目。今まで一日くらいなら休んだことがあっても、流石に三日連続はなかった。クラスメイトは少しだけざわつく。私は休んでいる理由を知っているから彼らの空気には同調しない。

ついこの間席替えをして、一列挟んで斜め前の席になった塚本くんの机をなんとなく眺める。塚本くんは週明け登校する予定だ。この三日間は東京に居て、受験する高校の下見に行ったり、新しく住む場所を探したりしていた。日曜の夜に帰ってくるらしい。

塚本くんが居ないと、私は学校で一言も口を開かない日があった。昨日もそう。授業で

当てられたりもせず、誰とも会話をせず一日を終える。

私の三つ後ろの席にいる孝士とはあまり喋らなくなってしまうていて、その間に彼は進路希望先を昇星にしていた。

三人ばらばらになることが決まったのだ。

塚本くんの家に泊まった翌日、家に帰ると既に姉はいなかった。急な用事が入ったとかで、朝一の電車に乗って帰ったらしい。

「喧嘩してみたみたいだけど、お姉ちゃんの方がしつかりしてるんだから少しは言うこと聞きなさいよ」

母の口から聞くこの手のお小言にはもう慣れた。行動派の姉の方が頼りになるように見えるらしい。私からすれば、自由奔放で他人の事情など鑑みない我侷な人にしか見えないのだけど、現実はその姉を評価するようだ。

けれど納得できる部分もある。私と姉を比べたら、誰もが姉の方を選ぶだろう。洋書を原文で読めるくらいしか取り柄がない私を、誰が選ぶというのか。

……選んでくれた。しかも二人も。

あの雨の夜、孝士と塚本くんに「俺を選べ」と言われた。それはつまり私も選ばれたことになる。

びつくりして、とてもすぐには返事ができなかった。塚本くんも察してくれたようで「今日はもう寝ようぜ」とそれ以上話をしなかった。

あれからもう二ヶ月近くが経つ。未だに答えは出せないまま。

この冬が過ぎて春が来たら、塚本くんは遠くに行ってしまう。

「では二百二十三ページから二百四十ページまでの問題を解いてくるように。今日はここまで」

講師の終了宣言とともに、周囲がざわついた。隣に座るめぐみも腕を伸ばしている。

「終わったあ。やっぱ数学分かんないや。どうしようかなあ」

「私も最後のは全然分かんなかったよ。試験に出やすいって言ってたからなんとかしない」と

先月からめぐみが行っている駅前の塾に通いだした。いくら合格圏内といえど油断はできないので、最後の追い込みをすることにしたのだ。

「次は英語か。千伽は余裕だね」

「や、和訳と英訳はいいんだけど、文法問題になるとちよつと困ってる。普段意識してないからいざ聞かれるとって感じで。あとリスニングもそこまで得意じゃないしね」

自動販売機でホットの紅茶を買い、次の講義が行われる教室に向かう。外は今日も雪が降っていた。

「あーあ、試験とか早く終わらないかな。優華に入って唯一ラッキーと思ってたのがエスカレーター式で受験のないことだと思ってたのに、学費が払えないから特待生試験受けるとか。うちの親はどこまで勝手なんだか」

次の教室の席に着いたためぐみは、愚痴交じりに呟きながらカフェオレを飲んだ。

「うまくいけば学費全額免除だっけ？」

「基準がいくつかあって、最高ランクが全額。親はその次のランクの八割免除でいいって言っけどそれでも大変だったの」

めぐみの成績は私よりも少し下。優華はあまり学力が高くないというから、授業だけだと特待生を狙うのは大変かもしれない。

「あたし的には半分免除にできたら上々かな。文句があるならバイトでもして返してやるわ。大学は自分で出来る限りどうにかしようと思ってるしね」

大学のことなんて考えてもいなかった。幾つも学校や学科があるんだから選べるわけがない。

「めぐみはもう大学どうするか決めてるの？ エスカレーターで優華の短大？」

「まさか。成人まであんなお嬢様学校居たくないよ。具体的な学校は決めてないけど、ぼんやり服飾系の学校行こうかなって。あ、そうなると専門学校か」

服飾系。確かにめぐみは洋服が好きだ。着るだけじゃなくてたまに簡単なものだったら作ったりしているのを知っている。

やっぱりみんな、自分の将来の筋道を立てているんだ。

「まあまだ分かんないけどね。高校行ってる間に別のことやりたくなるかもしれないし。そういえば千伽は？ あんまりそういう話聞いたことなかったよね」

「私、は」

言いよどんだのと同時に始業のチャイムが鳴った。騒がしかった空気が一瞬にして静け

さを取り戻す。

「後でね」

めぐみは小声でそう言って講師の方に目を向ける。

正直、助かったと思っってしまった。

講師に質問があるというのでめぐみとは教室で別れた。外に出ると雪は降り止む様子がなく、冷えてとても寒い。

バスを待っている間、暇つぶしに携帯を取り出した。塾に通うとどうしても夜が遅くなってしまうので、連絡用として買って貰ったのだ。おかしなサイトに行かず、一定の利用料金さえ超えなければ好きに使っていいと言われている。

まずは家にこれから帰るとメールしようかと思ったが、新着メールがあったのでそれを開くことにした。

塚本くんからだった。そういえば今日帰ってくるんだった。

“今帰ってきた。こっちすっげえ寒いよ。”

他愛のない内容に思わずくりとしてしまう。やっぱり東京の方が暖かいか。

・学校見学お疲れ様。東京は人が多いし、雪もあまり降らないから暖かいのかもね。

親にメールするよりも先に塚本くん返信する。

孝士とは対照的に、塚本くんとは今までと変わらず話せている。それは塚本くんがあの日のことをまるでなかったことのように振舞ってくれているから。私もそれを受け入れてしまっている。逃げていると言われたら反論できない。

お母さんへのメールを打っている途中でまたメールが入った。思った通り塚本くんからの返信だ。

・ 今日塾の日だっけ？ 帰って来て時間出来たらメールしろ。電話する・

電話なんて珍しかった。通話料金がかかってしまうからお互いあまりしないようにしているのに。

分かったと打ち込んで返信したころ、バスがやって来た。

「もしもし？ ごめんね遅くなった」

・ いいよ、俺も風呂入ってたし・

夜の十時半、夕飯とお風呂を済ませて部屋に戻り、塚本くんにメールをすると三分もしない内に電話がかかってきた。

電話は私に気を遣ってくれているのか、いつも塚本くんからかけてくれる。正直ありがたいので甘えさせてもらう。

塚本くんが東京に行っている間もたまにメールのやり取りをしていたけれど、こうして声を聞くのは久しぶりな気がした。

「高校はどうだった？ 住むところは決まった？」

・ そこら辺にある高校と変わんねえよ。まあ中高よりかは生徒数多いし設備も新しいけどな。住むところは仮で押さえた。あっちの塚本の分家が預かってくれる的なこと言ってくれたけど、だりいからマンション借りる・

高校生の一人暮らしでマンションを借りてしまうとは……。普通なら安いアパートか

下宿がいいところだろう。

・ やんなきゃいけねえことは二日くらいで終わっただけど、あっちにも塚本って結構居るらしくて挨拶回りさせられたよ……。別に世話になる日なんて来ねえのに、こういう時でかい家は面倒だわ。

電話の向こうから小さな溜息が聞こえる。思わず笑ってしまった。

塚本くと話していると気持ちが下降していたことを忘れてしまう。

不安に思っていることが消されていくような気がする。

・ おい、笑うなよ。どんだけくたびれたと思ってるんだ。

「ごめんごめん。疲れてるならもう寝た方がいいよ。明日も学校だし」

・ あー、まあ、そうなんだけどさ。

急に歯切れが悪くなった。どうしたんだろう。

「塚本くん？」

・ メールはしてたけど話してはいなかったし、声聞きてえと思っただけ。

しぼんでいくような声が、頭の中に直接入り込んでくる。

一瞬にして全身が熱くなった気がした。

・ お前も今日塾で疲れてるんだろ。さっさと寝ろよ。じゃ。

おやすみを言う間もなく電話は切られた。腕が耳元から下がり、携帯電話は電源ボタンを押されずに手からすべり落ちていく。

寝ろって言われたのに身体に力が入らない。

『声聞きてえ』

私も心のどこかで、同じことを思っていた。

翌日登校すると、見慣れない紙が黒板の横に貼られていた。紙の大部分を使って男性の顔写真が写っている。

「……指名手配？」

写真の上には強盗罪で指名手配されている旨が書かれていた。

「数日前にN市で目撃されてて、ナイフ持ってるかもしれないって」

突然背後から声が降ってくる。振り返ると孝士がすぐ傍に立っていた。

「孝士」

「おはよ。それ、気をつけろよ。まあこの辺じゃ不審人物なんてすぐ分かるか」

今までのことがなかったかのように気さくに話してくれている。びっくりしてしまい、上手く言葉を口に出来なかった。

「千伽？ どうした？」

「あ、その、ううん。なんでもないの」

「なんだよそれ」

孝士の笑ったところを久し振りに見た。

今、心の底から安心してる。

もう二度とこうして話してくれないのかと思っていた。感極まって涙が出そうになる。

「そうだよな。調子いいよな。悪い、そんな顔させたくなかったんだけど」

孝士が見当違いなことを言っていたので、反射で顔をあげる。

「違うよ、孝士は悪くない。私のはつきりしないだけで」

最後まで言おうとして、教室の異様な空気に気付いた。クラスメイトのほとんどがこちらを窺うような目で見ています。

「寒いけど廊下出ようぜ」

孝士もそれに気付いたのか、二人で教室を出た。

「前々から思ってたけど、うちのクラスの奴らってたまにすっげえいらつく視線送ってくるよな。特に女子」

それは孝士が人気あるから……とはなんとなく言えなかった。

「って、俺も同じようなもんか。無視するような形になっちゃったし。なんか、勢いであんなこと言っちゃまって、自分でも混乱したっていうか」

言いつらいのか、右を向いたり廊下を見上げたりと視線が定まらない。

「でも」

覚悟を決めたようにそう言うと、孝士は唇を引き締めてこちらを真っ直ぐ見つめた。

「言ったことに嘘はないし、撤回するつもりもない。あいつなんかが好きになるよりもずっと前から、俺は」

「あいつなんか、ってのは俺のこと？」

孝士の背後の方から声が聞こえた。声の主が孝士の背中から頭を覗かせる。

「塚本くん」

久し振りに見る塚本くんは長そうなマフラーをグルグル巻きにして、寒そうに背中を丸めていた。袖口からは白いセーターが見える。

「お前らよくこんなクソ寒いところで話が出るな。あとそろそろ予鈴鳴るぞ」

塚本くんはスマートフォン待ちうけ画面にある時計表示をこちらに見せる。確かにあと二分で予鈴が鳴る時間だ。

「塚本はこの土地で暮らしていけるのか心配になってきそうな格好だな。三限の体育、マラソンだぞ」

「東京が思いのほか暖かくて、こっち戻ったらすげえ寒いんだよ。まあこの冬越えたら東京だし、少し我慢するだけだ」

『東京』というワードを聞いて心臓が少しだけ跳ねた。なんでだろう、昨日の電話で自分から話題を出したりしているのに。

「それより、・あいつなんか・は聞き捨てならねえなあ。片思い歴の長さなんてなんの自慢にもならねえぞ？」

挑発ともとれる物言いに孝士があからさまに眉間に皺を寄せた瞬間、チャイムが鳴り響いた。

「教室入ろうぜ。この話題は始めたら長くなるか、殴り合いにもつれこむかのどちらかだろ？」

塚本くんが物騒なことを口にしてぎょっとした。孝士もそれに同意らしく、なにも言わず塚本くんの横をすり抜ける。

「千伽、授業始まる」

一瞬感じた緊張の空気は溶けており、孝士は柔らかい笑みをこちらに向ける。

塚本くんも、何事もなかったかのように私に「はよ」と声をかけて教室に入ってしまった。

「周りから見れば羨ましい話だけだね。ねえ由宇」

「ほんとだよ。二人の男子から告白されて、一人は地主で一人はもてる幼馴染？ 千伽ちゃんって見た目によらずやるよね」

「そ、そんな全然。私はそこら辺にいる凡人だよ……」

めぐみに塚本くん達のことを話したら、塾で同じ理科の講義をとっていて仲良くなった由宇ちゃんにも話が回ってしまった。由宇ちゃんは駅前寄りにある第一中の子だ。三人とも学校が違うので、それぞれに話題があって話をするのが楽しい。学校ではこんな風にないわいと話をするのではないし。

「でもさー、幼馴染の方は分かるけど、分家ナンバー1の息子はなんで千伽ちゃんのこと好きになっただらうね」

由宇ちゃんはN市の南の方に住んでいるので、塚本くんのお家のことはほとんど知らないらしい。あの辺りに住んでいる塚本家は規模の小さい分家ばかりだった気がする。

「息子も今までのろくな友達居なかったらいいから、千伽には悪いけど他に好きになるような人が居なかったってことなのかなあ。でも頭いいから人間よく見てるかも？ うーん、

千伽、その辺どうなの？」

めぐみと由宇ちゃんに見つめられ、返答に困ってしまう。

だってそんなの私が一番聞きたい。

確信できるのは、めぐみが言ったような理由ではないだろうということ。

あの家庭環境で育って両親が好きになれず、同級生とも距離を置き、言ってしまうえば人間不信だったと思うから。

そう考えると友達になれた時点で奇跡だったのかもしれない。それを好きとまでいわれちゃうなんて、本当、私なんかのどこが良かったのか。

「野郎のことなんてどうでもいいよ。千伽、あんたどっち選ぶの？」

めぐみから決定的な質問をされ、完全に言葉を失ってしまう。

これも私が聞きたい。あの二人のどちらかを選ぶなんて考えられない。けれど、いつかそんな日を迎えないといけないのか。

「千伽」

めぐみの人差し指が私の眉間に触れた。

「筋入ってる」

そんなに深刻な顔をしてしまっていたのか。思わず両手で眉間の辺りを押さえてしまう。

「確かに急に言われたって分かんないよねえ。特に千伽は人付き合い下手だし」

はっきり言われた上に、反論の余地もないのでなにも言えない。

「まあでもさ、考えるのも大事だろうけど、最後は直感で決めちゃいなよ。人間同士の付

き合いなんてきつとそんなもんだよ」

向かいの由宇ちゃんも「うんうん」と頷く。

「とか言いながらあたしら告白したこともされたこともないけどねー」

「そうそう。あははは！」

ある種自虐とも取れる会話だというのに、二人は可笑しそうにけらけら笑っている。それを見ている内に、なんだか私まで可笑しくなってしまった。

田舎ながらショッピングモールのおかげもあってか、少し活気が出てきた駅前はずっかりクリスマスモードに入っていた。ところどころに電飾が飾られていて、夜だけどころより明るい。雪は合間の休憩といったところか、今は止んでいる。

「あたしらにはクリスマスもなにもないけどね。ケーキくらいは食べれるかなあ」

ケーキ屋さんの窓ガラスに貼られたサンタとトナカイの貼り絵を見ながらめぐみはつまらなさそうに呟いた。

「親にプレゼントせがむような歳でもなくなったしね」

「え、今年まではギリギリセーフだよ！ あたしミシンせがんだもん。高い買い物だから一家共用ってことになったけど」

服飾系を目指すめぐみには必須の道具だろう。

「そっかあ。でも欲しいもの別にないんだよなあ。あるとしたら本くらいで」

「千伽って基本無欲だよね……。ずうずうしさは全部姉に持って行かれたのかしら」

はは、どちらとも取れない返事をしてしまう。あながち間違いでもない。あの人はいつ

でも欲しいものがあつたみたいで、お母さんやおばあちゃんによくお小遣いをねだっていた。決められたお小遣いの中でやりくりするという点だけは私が褒められていた。と、いつても家を出てからは仕送りを要求したこともないみたいで、アルバイトと奨学金でしつかり自活しているみたいだ。

夕飯前だけどもお腹が空いてしまったので、コンビニで肉まんを買って食べようということになった。周囲より一際明るい店内に入ろうとした時、脇にある看板が目に入る。大きなポスターとA4サイズの紙が一枚ずつ。A4の方は学校でも見た強盗犯の手配写真だった。なんでも東京にある老舗の和菓子屋さんを襲ったそうで、ニュースでも未だ逃走中だと伝えているのを一回見かけた。

何枚も刷られているのか、最近では町のあちこちで見つける。ここまで自分の写真が出回っているともう他の町へ行ってしまったのではないだろうか。

ポスターの方は高速道路開通反対の大規模決起集会への参加を促す内容のものだった。端がめくれており、風で少し泳いでいる。

「あー。そろそろだね、これ。署名だけじゃ足りないからって大々的にやるんだっけ？」

めぐみも、普段は話題に出さなくても気になっていないことはないようだった。めぐみの家も開通が決まったら取り壊しが決まっている区域にある。

「今、お父さん達が準備してる」

この集会の存在は随分前から知っていた。本屋の入口にも同じポスターが貼られているし、お父さんとお母さんは集会本部に所属している。

その集会にどれだけの力があるのか。本音を言ってしまうとあまり期待はしていない。

市長は元々賛成派だし、それに実質N市で一番力を持っているのは塚本家だ。塚本家にももちろん集会の声は聞こえるだろうけど、道路開通区域にある塚本くんの家が賛成をしてみせている以上、本家といえど屈服させるのは難しいだろう。そもそも、経済効果の観点からすればN市にとってプラスになる話だ。反対派には反対をするだけのいい材料があまりないといえる。

中学生でもここまで悟ってしまえる以上、なんとなくこの街の未来は決まっているような気がした。お姉ちゃんもは年単位で揉めると言っていたけれど、提案元の国だってそんな悠長には待ってられないだろう。

「めぐみは、道路が出来ることになって家が潰れるってなったら、どうする？」

めぐみの家ももちろん反対派だ。聞くまでもない質問かとも思った。

「うーん。正直、大人達がここまでドロドロに揉めてるのを見ると、どうでもよくなってきちゃったかな。家潰されるにしてもちゃんと補償してくれるし。多分あたしが女で、いつかどこかに嫁いで出て行く身だからかもしれないけど、大人達ほど思い入れがないのかも。潰れないで済むならそれに越したことはないよ？ 生まれてからずっと住んでる家だもん。でもさ、よく言うじゃん。形あるものはいつか壊れるって」

めぐみはめくられていた部分を看板に押さえつけた。粘着力がまだ残っていたようで、看板に張り付く。

「今はとりあえず、難しいことは試験だけで十分！ 大人達が決めたことに従うしかないんだし、あたしらはのん気に肉まんでも食べてようよ」

そういつてめぐみはコンビニの中へ入って行った。私は予想していなかった答えに、足

が固まってしまっている。

将来のことといい、めぐみはちゃんと考えてるし、視野を広くして世間を見てる。

一方で私はなんだ。ただ悩んでいるだけでろくな答えも出せず、こうして立ちすくんでいることしか出来ない。

姉の言葉を思い出す。

『自分の人生に『自分』がちっとも備わってない』

今は受験に合格するのが最優先だと思っていた。それからゆっくり考えればいかなかった。

高校に入ったら答えが出るなんてなんで思ったんだろう。そんな筈なのに。

このままだと三年経ったって変わらない。

どうやったら答えって出せるんだろう。

探し当てられるんだろう。

最近塾がない日でも受験勉強を考慮されてか、店番をすることはほとんどなかった。今日は件の決起集会の打ち合わせで家族全員が出払うというので久々の店番だ。夜遅くなると言っていたからこのまま店じまいまですることになると思う。

寒くなってからは遅くにお客さんがくることも稀なので、レジの机に問題集を広げて勉強に励んでいた。もっと頭を使わないといけないことがあるというのに、今はこれしかす

ることが思いつかない。

塾の課題が終わり、シャーペンを持ったまま腕を上には伸ばす。同時に頭も上げたので、天井が目に入った。

そのままの状態で天井を見つめる。毎日視界のどこかしらには入っただけ、こうしてまじまじ見るとなんだか初めて見るような感覚に陥る。

ここで十五年育った。それよりもずっと前からこの店はある。

数え切れないくらいの思い出が詰まっているこの場所が、無くなる瀬戸際に来ている。

無くなったら絶対に寂しい。それは確信できる。けれど、時代の流れに逆らってまで縫うべきものなのか。時代と一個人を比べたら、明らかに時代の方が大事だ。この事実を割り切れるかどうかは選択の行方は委ねられている。

……やっぱり答えは出ない。

小さくため息を吐き、復習をしようとテキストを手を取った。

その後も勉強を続け、閉店三十分前になった。お客さんも来ないのでそろそろレジ締め作業でも始めようとしたところに店の電話が鳴った。

「はい、高橋書店です」

「あ、千伽？ 今店番？」
孝士だった。

「うん。なにか欲しい本あった？」

「や、学校に貼ってあった指名手配の貼り紙あっただろ？ それに似た奴がこの辺うろ

ついてるって話が出てるみたいで。千伽、今一人だろ？ なんだったら俺がそっちに行くかと思つて・

指名手配の貼り紙は店の中にも貼られていた。いつ見ても凶悪そうな顔をしている。

もう別の街に行つていと思つていたのに。写真の男がナイフを持っている姿を想像し、身震いがした。

お言葉に甘えてお願いしようか。

駄目だ、来る途中でなにもない保証はない。

「大丈夫だよ。もう店じまいするし、戸締りしつかりするから」

いつまでも孝士に甘えてちゃいけない。高校生になつたらきつとこんな風に気軽に会うこともなくなる。

「ならいいけど。早いかもしれないけどもう店閉めちまえ。こんな天気じゃ誰も来ないだろうし。」

「うん、そうする。ありがとう」

電話を切ると、同時に携帯にメールが入った。しかも二通。

お母さんから、もう少しかかりそうだから店を閉めてしまつて構わないという内容のもの、塚本くんから。雪で電波が悪かったのか、塚本くんのメールは少し前に送信されたものだった。

『まだ店やつてるならさっさと閉める。今日集会だからお前一人だろ？ 危なっかしい』
みんな考えることは同じのようだ。勉強ばかりやっていた自分の危機感のなさに呆れてしまう。

もう閉める旨をメールしようとしたところで、誰かが入ってきた。「いらっしゃいませ」

黒いコート、毛色の帽子を深く被っている。東京から帰ってきたばかりの塚本くんみたいにマフラーを何重にも巻いていて、男性だということしか分からない。こんな人、近所に居ただろうか。

男性は雑誌のコーナーに立つと立ち読みを始めた。普段なら羽ぼうきでも持って退散させてやってるのに、なんだか怖くてそれが出来ない。

一瞬見えた瞳が、とても暗かった。

レジに入ってレジ締めを始める素振りをする。空気を読んで出て行って欲しい。

そんな願いも虚しく、男性は熱心に雑誌を読み始めた。なにを読んでいるのかとちらっと覗いてみる。ゴシップがよく載る週刊誌だ。

「すみません」

盗み見たのとほぼ同時に声をかけられたので肩が震えるくらいに驚いてしまった。あわててレジを閉め、雑誌コーナーに向かう。

「は、はい」

「この雑誌の最新号ってまだ発売してないの？」

男性は今まで読んでいた雑誌を指さして尋ねる。

「すみません。田舎なのとこの雪で入荷遅れてしまっていて。多分明日には入ると思います」

思ったより優しげな声色に安心した。きっと寒いからかなりの防寒をしているだけなん

だろう。

「本当に明日？ 確認してくれない？」

「あ、はい。ちよっとお待ちください」

レジ横に置いてある入荷予定表を見ようと男性に背を向けた。

二歩進んだところで歩みが止まる。

後ろから手が伸びてきて口が塞がれた。

「……!!」

「大人しくしろ」

さつきよりも低い声が耳元で囁かれる。ぞわり、と背中に悪寒が走った。押さえられている口元が気持ち悪い、なんて思っている顔に入らないものが目に入る。ナイフ。

最近よく見かける貼り紙に載っている顔を思い出す。目つきが似ていた。

この人、指定手配の、強盗犯。

「レジ開ける」

声も出ないし、身体がどこも動かない。ガタガタ震えてるだけ。

「早くしろ！」

怒鳴られたと同時に背中を押される。足に力が入らず転んでしまった。恐る恐る振り返ると、強盗犯はものすごい形相でこちらを睨んでいた。

このままなにもしないでしたら絶対に危ない。本能がそう感じ取り、腕の力で前に進む。レジ台を掴んでなんとか立ち上がったところで、電話が鳴った。私も強盗犯も予想外の出来事に電話を凝視してしまう。

「出る」

出ないのも不自然だと判断したのか、強盗犯はナイフを構えたまま指示する。震える手で受話器を持った。

「もしもし」

・千伽か？ お前なんでメール返さねえんだよ。今暇なんじゃねえの？

塚本くんだった。聞き慣れた声に安心して、涙が出そうになる。

けれど、刺さるような視線が痛い。視線の主は見せつけるようにナイフを弄ぶ。「いつでも刺せるぞ」と言っているようだった。

「ご、ごめんね。レジ締め始めちゃってて」

・ふうん。まあいいや。まだ家族戻ってきてないんだよな？ 今近くに居るから寄る。

「え」

思ってもいないことを言われ、変な声が上がってしまう。

駄目、今来たら。

「い、いいよ。もうお店も閉めるし。お父さん達ももうすぐきつと」

・なにそんな焦ってるんだよ。行っちゃいけない理由でもあるわけ？

どうしよう、強盗犯が来ているからなんて言えない。強盗犯の方を見ると、苛立っているのか「早く切れ」と小声で命令された。

「と、とにかく駄目。今日は来ちゃ駄目！」

叩きつけるように受話器を戻す。ただ話をしていただけなのに息が上がった。

「ちっ、面倒な電話か。おい、この袋にレジの金突っ込め。札だけでいい」

皺くちやになっっているスーパーの袋を押しつけられる。ナイフの切っ先が私のお腹のすぐ近くにあった。

「刺されたくなかったらさっさとしろ」

なにかしたら次の瞬間には刺される距離にナイフがある。落としそうになりながらも鍵を取り、レジを開けた。

受け取った袋に指示通りお札を入れていく。

これだけのお金を稼ぐのにお父さん達がどれだけ苦労してきたか。悔しくて、でも怖くて、涙が出る。

「う……」

いっそ刺されてしまえばいい。

「全部入れたんなら寄せ」

引っ手繰るように袋を取られた。ナイフがお腹から離れ、強盗犯は店から出て行こうとした。

お札だったから軽い。でも、本当はとても重い。こんな人に渡していいものじゃない。

万引き騒ぎの時は塚本さんと孝士が店を守ってくれた。

今は誰も頼れない。

だったら、私を守るしかないじゃない。

「……返して」

電話の時以外全然出なかった声が、自然と漏れた。声に反応したのか強盗犯が振り返る。「それはあなたに渡せるものじゃない。返して！」

走って強盗犯にぶつかった。強盗犯が突然のことによるける。刺されないようにすべく、ナイフを持っている右腕を掴んだ。

「おいっ、離せ！」

「いや、お金返してください！」

「ふざけんなっ」

強盗犯は身を振りながら私を突き飛ばそうとするが、頑として右腕を放しはしない。拳を作って右手を叩く。まずはナイフを落とさせたい。

うまく狙いが定まらず、何度かナイフの切れる方に触れてしまった。血が出たけどそんなの気にしていられない。手なんかどうでもいい。お互いよろけながらの攻防で柵に激突し、本が何冊か落ちる。

強盗犯も私の背中を何度も叩いてきた。息が詰まってむせてしまう。力が入らなくなっ
てしまいそうなのを必死で堪える。

「っ、いい加減にしろよ！」

苛立ちが頂点に達した怒号とともに、強盗犯の膝がお腹に勢いよく入った。息が詰まる
どころの問題ではなく、なにか吐きだしそうになってしまいその場にしゃがみこんでしま
う。

「手間かけさせやがって」

強盗犯は吐き捨てるような言葉を私に浴びせ、店から出て行こうとする。手を伸ばして
足を掴もうとした。けれど、目が霞んで距離感が分からない。

立ち去って行こうとする強盗犯の向こう側に、人影があるように見えた。

「くそ」

人影であっているようだった。強盗犯が人影に反応して立ち止まる。

「なにやってんだお前」

目の焦点があつてくる。ぼやけていた人影が誰なのか判別できた。

「つか、もとかん」

「千伽になにやったんだって聞いてるんだよ!!」

塚本さんの怒号で意識がはつきりした。

来ちゃ駄目って言ったのに！

「あな、お前は」

「あ？ 俺のこと知ってるの？ そんなことはどうでもいい。お前指名手配犯じゃねえか。ふざけんなよっ」

塚本くんは強盗犯に向かってタツクルしていった。強盗犯は押し倒され、そのままもつれ合う。

「塚本くんっ」

「裏口から出ろ」

「でも」

塚本くんを置いて自分だけ逃げるわけにはいかない。

「早く！」

そうだ、外に助けを呼べば。

土足のまま住居スペースに入り裏口から外に出た。靴が片方脱げてしまったようで足の

裏が冷たい。外は真っ暗な上に大きな粒の雪がこれでもかというくらいに降って吹雪になっていた。

「だ、誰か」

万引き騒ぎで協力してくれた向かいの家に駆け込もうと思ったが、家の電気がついていなかった。こんな時間のこんな天気、この辺りは人なんて通らない。

「誰か」

早くしないと塚本くんが危ない。早く、早く。

声、出てよ。

「誰か、助けてくださいっ！」

普段は絶対出ない大声。雪に吸い込まれてしまいそうだったけど何回も叫んだ。

誰も居ないので立ち止まっても仕方ない。少し先に明かりが見えた。車のランプだ。そちらに走り出す。靴が脱げた方の足の裏がじんじんと痺れる。

車の主は駆け寄ってくる私に気付いたのか、運転席から降りてきた。

「高橋さん？」

車から出てきたのは塚本くんの運転手だった。近くで待機していたんだ。

「う、てんしゅさんっ、塚本くんが、塚本くんが」

「楓さまが？」

「店、強盗入って、早く！」

混乱して言葉がまとまらない。それでも運転手さんは異常を察したのか、すぐさま走り出した。私も追いかけてようとしたけど雪で滑って転んでしまう。今になって全身の痛みが

押し寄せてくる。

「塚本くん」

運転手さんに任せてる場合じゃない。なんとか起き上がって店に戻る。

軒先が騒がしい。

「離せてめえっ」

「楓さま、警察を」

「分かっているっつーの！ くそ、こういう時スマホはクズだな」

入口に飛び込む。運転手さんに取り押さえられている強盗犯が一番に目に入った。

その次に視界に入ったのは、奥で座り込んでいる塚本くん。

と、腕から流れる、血。

「つかもと、くん」

「千伽。電話借りる。携帯使いにくくてしょうがねえ」

塚本くんがなにを言ったのかよく聞こえなかった。そんなことより、腕から血がたくさん流れている。私の手の傷なんて比べ物にならない。

「楓さま。止血をしてください」

「後だろそんなもん。あんま痛くねえし。とりあえず腕上げとけばいいか。あ、警察？ 指名手配の強盗犯取り押さえてるからすぐに来てほしいんだけど」

運転手さんに押し掛かれてぐったりしている強盗犯の横を通り、塚本くんに近づく。

「ああ、そこ。高橋書店。あ、ついでに救急車も呼んでくれたりしない？ 二人分。これ別に電話した方がいいの？ ああそう。じゃあよろしく」

二の腕辺りを切りつけられていたようだった。白いセーターが真っ赤に染まっている。傍に腕の部分が裂けたコートが落ちていた。

「千伽。これ金」

電話を終えた塚本くんから袋を渡された。少し血が付いている。

なんで、塚本くんが。

もしも切られたところが腕じゃなかったら。お腹とか、もっと大変なところだったら。

そう考えただけで目の前が真っ暗になった。

「なんで来たの」

「は？」

口元が震える。それでも言わないわけにはいかなかった。

「来ちゃ駄目って言ったのに。怪我までして、塚本くんの馬鹿！」

「はあ!？」

さつきまで決死に守っていたお金を放り投げた。

「そんな血出して、逃がしてよ！ 怪我なんかしないでよ!!」

「ふざけんな、お前こそなにが来るんだ！ 俺が来なかったらお前どうなってたんだよ！

そんなボロボロで、お前の方が馬鹿じゃねえかつ」

「塚本くんに言われたくない！ お腹とか刺されたらどうするの!? 塚本くんになにか

あったら、やだ、そんなの」

塚本くんの顔が滲む。頬に生温かいものが伝った。

「やだあ……っ」

止まらない。

涙も、とつくに溢れ出てしまっている気持ちも。

不意に手が握られた。痛いくらいの力が入る。

肩に塚本くんの頭が寄りかかった。

「俺だって、お前が倒れてるの見てどんだけ怖かったか分かってんのか。無事なの分かって今すげえ安心してんだ。好きな女の大事なものを、守ろうとしてなにが悪いんだよ」

塚本くんの声も震えていた。

手を握られていない方の腕が自然に動いて、塚本くんの頭を包む。

今抱いているこの気持ちをも、私は知らない。

遠くでサイレンの音が聞こえた。

「犯人、元塚本家の人間らしいよ。分家に婿入りしたはいいけど離婚したんだって。だからN市に来たのかもね」

めぐみは自分が持ってきた林檎を一欠片齧った。私もありがたく貰う。甘くて美味しい。

あれから、警察と救急車がやって来て塚本くんと私は病院に運ばれた。塚本くんは三針縫う怪我だったらしく、処置をすると帰って行ったという。私は外傷こそ手や足のかすり傷だけだったものの、お腹を蹴られたので検査入院することになった。あと一時間ほどで出る結果に問題なければ明日には退院できる。

救急車に運び込まれてすぐ、緊張が解けたのか気を失ってしまったらしい。目覚めると血相を変えた両親とおばあちゃんの顔が見えた。寝起きだというのに頭に響くくらいの大声で説教をされ、お母さんには泣かれてしまった。お金なんてどうでもいい、幾らでも渡して逃がせば良かったんだと。私が塚本くんと言ったことと同じだった。

大事な人は、お金にもなにも替えられない。

「手、傷痕残らないといいね」

めぐみは包帯が巻かれている私の両手をそつと撫でた。かすり傷とは言え鋭利なナイフで切れたものだ。もしかすると少し残るかもしれない。

けれど、私なんかより。

「塚本くんの傷は、痕残ると思う。神経は大丈夫だったからどうでもいいって言ってたけど、きつと目立っちゃう」

血で染まったセーターを思い出す度に胸の辺りが苦しくなる。

塚本くんのことを考えると、うまく呼吸ができない。

今だって泣きそうさ。

「千伽さ、もう決まってるんじゃない？」

残った林檎に手をつけず、めぐみは静かに訊ねた。

なにか？ と聞くほど私も馬鹿じゃない。

その問いを聞いて目を閉じる。

昨晚はよく眠れなかった。けれど、今まで頭の中に蔓延っていた迷いは消えていて。

答えはもう見つかっていた。

「うん、そうだね」

目を静かに開ける。

大部屋の空きベッドがないとのことで入れられた個室は、誰も喋らないととても静かだ。外は粉雪が舞っていて、白い世界になっている。静けさは雪のせいもあるかもしれない。

「正解かは分からない。そもそも、こういう問題に正解なんかなくて、選んだ道を進むしかない。だからみんな後悔する」

合っていたのか間違っていたのか分からないから、少しでも理想から離れると捨てた選択肢を思い出してしまふ。その道の方が悪い方向に進むかもしれないというのに。

今、私が出ているこの答えだって、いつか悔いることになるかもしれない。それでも先に進むには絶対を選ぶしかなくて。

「あたしが聞いていいものじゃないかもしれないけど、どうするの？」

どっちにするの？ とは聞かなかつた。こういうところ、めぐみは言葉選びが上手い。

「二人とも大事なのは変わらないよ。でも」

『「一緒に居る」と『隣に居る』は、似ているようで違う。』

これが私にとつての決定的な差になった。

「わがままをね、言おうと思ってるの」

三人と一緒に居られる中学生生活は残り三ヶ月。

「春まで答えを引き延ばさせてもらおう」

私はこの時間を今まで以上に大事にしたい。

クローバー

雪が止んで草木が芽吹き、さよならが来るその時まで。

NONSTOP



やるうぜ!

土本強

Illustration:U35

あらすじ

田尻すなおと中村ひかるは高校一年生。ふとしたきっかけからゲームを作ることになった。次々と巻き起こる難問、社会からの軋轢、そして恋。二人は努力、友情の果てに勝利をつかむことが出来るのか……！（内容には若干の誇張があります。申し訳ありません）



横井ひろこ

今年の春大学を卒業したばかりのぴちぴち女教師。22歳独身。

田尻すなお

自称「どこにでもいる平凡な高校生」。昔ゲームをやっていたことはあったが最近は無沙汰。

中村ひかる

孤高の眼鏡。古いコンピュータを未だに愛用する不思議なコンピュータマニア。ただし勉強はいまいち。

第五話 痕

その男はやにわにわにこう叫んだ。

「君たちは凄い。確かに凄い」

年も明けたある日の放課後、視聴覚教室には中村 ひかる、真島 まこ、小沢 すみこの三人が集まっていた。突然の闖入者に三人は顔を見合わせる。

男は続けた。背は高い。肩幅も広く、制服に包んだ体は明らかに無駄のない筋肉が詰まっている。

「君たちの作品を見させてもらった。素晴らしい。だが」

男は芝居がかった口調で口の端をあげた。

「君たちにはまだ足りない物がある。それは」

男は胸をはった。

「物語だ！」

「……どちらさまですか？」

小沢は怪訝な顔をしたまま男に聞いた。

「名乗るのが遅れた。俺は坂口。坂口 ゆうただ。好きに呼んでくれ」

男——坂口は自信たっぷりに答えた。さらに続ける。

「俺は君たちに物語を提供できる。さらに素晴らしいゲームを作ることができる」

そのとき、開いたままの入り口から田尻 すなおが駆け込んできた。田尻は坂口の脇を素通りして中村の元に駆け寄る。

「ねえ、夏の格闘ゲーム、何本売ったか覚えてる？」

中村はあごに手を当てた。しばらく指先で撫でてから絞り出すように答える。

「確か、四十八枚焼いて持っていったのは確かだ」

「そんな中途半端な数だったっけ？」

「確か」中村は首をあげて田尻の顔を見た。「五〇枚入りの束を買ってきて、うち二枚はデバッグに使ったはずだ」

「そっか。じゃ四十八枚ってことで」

「違う」中村は首を振った。「朝十一時の時点でなくなりそうだったので俺と真島で慌てて刷りに戻った」

「何枚？」

「さあ……三〇枚ぐらいまでは覚えてるんだがディスクが尽きたところで慌てて戻ったから正確な枚数は不明だ」

「じゃ七十八枚ってことでいいや」

真島は首を振った。慌てて田尻は真島を見る。もう言葉が無くても呼ばれていることがわかるようになってきた。

「私も三〇枚くらい」

「そっか、あの時二人で手分けしたんだっけ。僕一人で店番してて」

「百枚は刷ってるはず。だって、ジャケットそれだけ作ったし」

田尻は思い出す。最後の方はジャケットイラストも足りなくなってポスターつきのレア物を買った気がする。

「つまり正確な枚数は誰も知らないのかぁ……」

「学園祭の時なら覚えてるわよ」

小沢が立ったままの田尻に答えた。

「全部で百五十枚。ただ、あの時は無料で配ったし、メディア持ってきた人にコピーした数まではわからないわね」

「うん。それは大丈夫」田尻は頷いた。「売上が無ければ別に」

「その前は三枚。初回は二枚だ」

中村は真面目くさって答えた。田尻は吹き出した。

「覚えてる覚えてる。あんなに売れないものだとは知らなかったもんなー」

「凄いわよね、百五十人って全校生徒の半分よ。学園祭だから学外の人も来てたと思うけど」

小沢はつい数か月前のこの部屋の混雑ぶりを思い出していた。四台で一セッション。最大八セッションが同時にロビーに入れるが、ロビーはほぼ埋まっていた。もちろん展示に使っていた視聴覚教室は大変な盛況だった。

「やっぱさー、見かけと音楽があって、実物あると違うよなー」

「ゲームって遊ばないとわからないよな」

中村はしみじみとそう言った。田尻は二回も頷き、小沢は完動の余韻に震えていた。

「あー……」

まったく無視されたままの坂口が三人に声をかけあぐねていると肩を叩かれた。いつの間にか立ち上がっていた真島は何も言わずに伝えた。わかってるから。

☆

「えーと、坂口、だっけ？」

市立中央高校、ゲーム製作同好会では例によって椅子を引っ張り出して車座になっていた。いつもと違うのは普段の四人の他に坂口がいるということ。坂口は握りこぶしを片手に構えて力説した。

「どうしてあれだけのものを作りながら物語に入れ込まない！」

「と、いわれてもなー」

田尻は頭を掻いた。

「別にお話必要なゲーム作ってこなかったしなー。ぶっちゃけストーリーなんか無くても困らないっていうか」

「そうじゃない！」坂口は叫んだ。盛大に唾が飛ぶ。「君は物語の力を過小評価している！それは凄い物語を見てないからだ！」

「凄いつて言ってもねえ」小沢はポケットからハンカチを出すかどうか悩んだ。下手に刺激するとまた面倒なことになりそうな気がする。「お話がどう凄いかなんか、わからない

じゃない」

「それは、凄い物語を見たことが無いからだ」

坂口は断言した。

「今週の日曜日は時間が取れるか？」

坂口以外の四人は顔を見合わせた。

「いやまあ、多分」「俺なら問題ない」「ん」「別にいいわよ、でも何？」

「映画で物語の力を見せつけてやる。うちに集まれ」

「ここじゃまずいの？」

視聴覚教室というくらいだ。プロジェクターは教室の前方に用意されている。

「いや」坂口は言葉を濁した。「とにかく来てくれ」

そのとき、一応のノックが明け放した視聴覚教室の入り口の扉から響いた。

「田尻君、いい？」

そこに立っていたのは顧問の横井 ひろこだった。少しだけ困惑した表情で田尻を見ている。

「はい」田尻は慌てて立ち上がった。「ええと、何とか」

「どうかしたのか？」

中村は田尻を見上げた。田尻は頭をかきながら曖昧な笑顔で答える。

「あー、いいのいいの。気にしないで」

☆

地図を渡されて集まった坂口の家は、市内でもかなりの外れの方にある広い平屋だっ

た。

周りには畑と水田が広がる。冬なので水田に水はなく広い庭には何羽もの鶏が放し飼いられていた。

「よく来たな」

玄関で私服姿の四人の姿を見つけた坂口は板張りの縁側へと導いた。いくつか部屋があるうちの一つのふすまを開ける。そこには五十インチ以上はある液晶テレビが置かれていた。細いスタンドで立てられたスピーカーは部屋の四隅に置かれ、巨大なスーパーウーハーがテレビの脇に置かれている。床の間の掛け軸と非常に似合わない。

「まあ、適当にかけてくれ」

坂口はテレビに接続された年代物のVHSのビデオデッキにテープを入れた。テープには手書きで何かラベルが貼られている。使い込まれているので容易には読み取れない。

四人は促されるままに畳張りの床に座った。遅れて坂口もあぐらをかく。

「映画、何だよね？ 古いの？」

田尻は既にノイズの載った画面に見入っている坂口に聞いた。

「ああ。いまから四十年前。この町の高校生なら見ていないものはない伝説の作品だ」

「生まれてないな」

「あたりまえだ」坂口はため息をついた。「でも、知らないのは損失だ」

テレビがノイズを止めてテロップを映し出す。テロップにはこう書かれている。

——この作品は性的描写を含むため十八歳未満のものは見てはいけません。

「え？」

やろうぜ！

続けざまに現れるタイトルと映倫のマーク。映倫のマークがついているということは映画館でかけるための審査が行われた正規の作品であることを示している。

「ちよつと待つて坂口、これ、アダルト……」

「ああ、ポルノだ」

何事もないかのように坂口は田尻に答えた。

「何でポルノなのに高校生なら見てないものはない、という話になるのさ」

「見るだろ、普通」

「えー？」

田尻は言葉じりを濁す。真っ赤になって画面をちらちら見ながら小沢が続ける。画面にはどこか違和感のある見慣れた景色を背景にして何かオープニングテロップが出ているらしい。とりあえず今のところポルノという雰囲気ではない。

「デリカシーってものがないわよ！　いくら自分が好きだからって」

「デリカシーと作品は関係ないだろう。たまたま映画のジャンルがポルノだっただけで、物語を持つ作品であることには違いはない」

「でもさー、こういうのは女の子のいるところではちよつと……」

田尻は小沢と真島を見た。小沢はなるべく画面を見ないようにしているようにも見えるが、案の定真島は画面に食い入るように見つめている。田尻は何となく反論がむなしき気がしてきた。

「いいじゃないか」中村が画面から目をそらさずに言った。「よっほど駄目ならそこでやめればいいんだし。坂口の言う『物語』の力ってやつを見るいい機会だ」

「あーもう！」小沢は叫んだ。「いいわよ、付き合っただけ。でも、今度は不意打ちはなしよ！」

「まかせとけ」坂口は小沢に向かって口の端を上げた。「すぐに判るさ。見せた理由が」

画面ではちょうど男性の人物が走っていた。どうやら主人公らしい。メイクは少し大人風になっているが中の人はおそらく高校生だろう。

☆

映画はロマンスあり（ポルノなんだからあって当然だ）、ドラマあり、葛藤とその解決、そしてアクションで締めるという王道の展開を見せた。確かに途中に数回ポルノであることを主張するようなシーンが挟まっていたが、現在の夜ドラマよりもソフトな表現になっている。

何よりも、その物語に小沢を含めた同好会メンバーは引き込まれ、気がついたらあっという間にエンディングになっていた。小沢にいたってはアクションの緊張が解けた末の少し苦いハッピーエンドに思わず涙をこぼしたほどだった。

「どうだ？」

坂口はビデオデッキを操作して止めるとテープを巻き戻し始めた。

「凄いな、これ」

一同を代表して田尻がそう答えた。その思いはみなずれていない。

「だろ。メディアなんてのは何でもいいんだよ。この時代では映画が最良のメディアだった。今ならゲームだ」

「何でゲームにこだわるの？」

「いろいろ試した結果だ」坂口は立ち上がった。「少し待ってろ。ちょっと物を取ってくる」
「お客さんか？」

ちようどそこに初老の男性が玄関からやってきた。日に焼け、引き締まった筋肉は坂口を髣髴とさせる。

「またあれを見てたのか」

「いいじゃないか、父ちゃん」

初老の男性は坂口の父だったらしい。坂口はあまり取り合わずに家の奥へと消える。

「まあ、あれを見せたのは俺だからあまり責めるのもアレか」

「さつき、当時この町の高校生はみな見てたとか坂口君……ゆうたくんから聞きましたけど、どうということなんですか？」

田尻は父らしき男性に問いかけた。

「あの映画は、自主制作でな。出てるのはみんな先輩だったんだ」

「自主制作……」

田尻は自分たちの境遇を思い返す。少し坂口が声をかけてきた理屈が見えてきた気がする。

「俺からすると二つか三つ上の先輩が素人役者としてこの町のおちこちで撮影をしていた。見覚えがある景色がたくさんあるのは思ったよりもこの町が変わってないからだろうな。高速がくるとまた違うんだだろうが」

「誰が作ったんですか？」

小沢はオーブンングテロップをまじめに読んでいなかったことを後悔していた。

「実は判らない」男性は今は何も映されていない画面を見つめ、遠い目で答えた。「役者はわかる。でも、脚本や演出、撮影をしていたのが誰なのかは誰も頑として口を割らなかつたらしい」

「口を割らなかつた？」

不思議な表現に中村は眉をひそめた。

「当時はビデオなんて便利なものはなかったのでゲリラ上映会があちこちで行われていたのが不純行為として問題になった。何せポルノだ。上映してたのは出演していた高校生やその後輩たち。でも、首謀したのが誰なのかは結局わからずじまいだった」

「でも、映倫のロゴ出てましたよ？」

「このテープは後日別の団体がフィルムを買い上げて上映できる状態にしたものだ。だから、そこから調べてもその団体までしかつかまらない」

田尻は喉まで言葉が出掛かったがその言葉は坂口の声にかき消された。

「これを見てくれ」

坂口は大きなダンボールに一杯分の紙の束を持ってきて四人の脇に下ろした。畳のしなり具合から中の密度がわかる。父と思われる男性は肩をすくめて家の奥へと消えた。

「何？ これ」

紙の束はダブルクリップで留められている。分厚いものでは百枚程度、薄いものでは三十枚程度。おおむねワープロ打ちなので特に見づらいものではないがその書式はかなりバリエーションに富んでいた。

「こっちは小説。これは戯曲。これは映画の脚本だな。一応ストーリー自体はすべて違う

ものになっている」

「これを坂口が？」

束の量に目を丸くして小沢は坂口を見上げた。さっきまで涙ぐんでいたのでまだ少し目が赤い。

「いろいろ試した。小説が一人でできるものの中では一番イメージに近いな。映画や演劇を作っている連中は外からの脚本には興味はないらしい」

それは坂口のやり方がまずかったんじゃないかと田尻は言えなかった。ゲームを自分で作り始めたときにそこまで考えたことはあるだろうか？

「そこに君たちのゲームだ。学園祭の時には寡聞にして知らなかったが、つい先日そのうわさを聞きつけた」

「全校生徒の半分って、この程度よね……」

小沢がため息をついた。

「これだけのゲームを作ることができる者がいるのなら、物語を載せることでもっと魅力が増すはずだと確信した」

「それがおととい？」

「ああ」坂口は腕を組んで大きくうなずいた。「やらないか、一緒に」

☆

翌日の月曜日。

坂口を含めた五人は視聴覚教室に集まっていた。

「何ができる？」

坂口の質問に中村が答えた。

「今ならポリゴンによる3D表示だな。まずは見てくれ」

中村は例によってパソコン上のNetBeansをキーボード経由で操作した。学園祭のときに仮組みした背景の上に等身低めのキャラクターが載っている。

「キャラクターは元のグラフィックを見ながら真島がモデリングとモーションをつけた」

「ポリゴン難しい。絵で書くほうが簡単。でも、カメラと演技させるのにどうしても必要」
真島は画面をにらみつけた。しばらくにらんだ末やにわに立ち上がり、スクリーンショットを撮ってフォトレタッチツールに貼り付け、その上からマウスで器用にあたりをつける。

「ほんとはこうなる筈」

マウスで書きなぐった線は目の位置を同じにする以外はだいたいぶスクリーンショットとは異なる。手足は大きさにだいぶ差があり、手前は巨大に、奥は小さくなっている。

「ともあれ、計算と真島の言う違う部分をどうやってあわせるのかはおいとくとしても大体この画面で進められる」

「キャラって何体も出せるんだっけ？」

「ああ」真島は中村に席を譲った。中村はフォトレタッチソフト自体は最小化した上でキャラクターが肩を上下させているゲーム画面を出してキーをいくつか押す。「主人公と見分けがつかないのは勘弁してほしい」

画面中には元いたキャラクターと同じ見かけのキャラクターが複数出現し、思い思いに歩き回っては攻撃モーションをとる。動きが少しざらついているように見える。

「理論上はキャラクター数の上限はないが、増やすごとに滑らかさが失われる。パソコンの性能しだいだ。パソコンには性能がいいものもあるし、悪いものもあるのでどういう機械でもそれなりに動くよう細工してある」

「ほう。凄いな、これは」

坂口が身を乗り出して画面を見た。画面上にはすでに二十体近くのキャラクターが出ている。

「でね、結局いろいろ考えたんだけど」

田尻の声で坂口は席へと戻った。画面上のキャラクターの乱舞はそのまま続いている。

「今回はこのプログラムを応用してRPGがいいんじゃないのかなって」

田尻はすっかりおなじみになったフォーマットのレポート用紙を広げた。ゲームの概要と予想画面が書かれている。予想画面の脇には操作の概要が書かれており、そこには移動画面・戦闘画面・ステータス画面のそれぞれの操作が書かれている。基本的にマウスでの操作を中心としたものになるらしく、左クリックと右クリックでの意味が異なる。

「RPGと一口に言っても広いわよ」

小沢が田尻の企画書を見ながら聞いた。田尻はうなずいた。

「日本風のRPGって言ったほうがいいのか。マップがあつて、シンボルとエンカウントして、戦闘モードに入るようなゲーム」

「物語はどうやって入れる？」

坂口の問いに田尻は企画書にある手書きの画面イメージを指差した。

「大筋はゲームとして進めていくんだけど、特定の場所にたどり着いたときや、特定の人

と話をしたときにはカメラの位置が変わってキャラクターが演技をするような感じ」

「演技で判るのか？」

「たぶんね。たいしたことできないけど、そこはカメラワークとストーリーの内容でカバーするって感じ」

坂口は画面イメージをにらみながら出来上がるであろうストーリーを想像していた。

「世界観は？」

「そんなものないよ。だって、ゲームに必要なだけしか作ってないから」

「いいのか？ それで」

「うん。坂口作ってよ」

坂口は田尻の画面イメージから立ち上ってくる感触から何かを感じ取ろうとした。

「画面はポリゴンとキャラのモーションで演技。ここ数ヶ月作ってきた中村の技術をそのまま使う方向で」

「アクションは？」

田尻は真島に答えた。

「戦闘シーンはアクションゲーム風に。パーティプレイになるので残りのキャラクターはAIで戦闘させる形になるかな」

「AIか」中村は一旦動いているサンプルプログラムの画面を見てから企画書へと目をおろした。「いろいろ考えると必要だが、何とかなるだろう」

「音楽はどうするの？」

小沢の質問に田尻はチラッと坂口を見てから答えた。

「基本的には今までと同じような感じで作るんだけど、ストーリーと世界観が決まったら何曲作ればいいのか決めるような感じ」

「だいぶ曖昧ね」

「ごめん。だって、ストーリー無視して作るわけにもいかないでしょ」

「心配するな」坂口は胸を張った。「明日までに全部用意してやる」

「大丈夫？」田尻は目を丸くした。「全部って、そこまで気合入れなくていいのに」

「世界観やストーリーが決まらないと真島や小沢が困るだろ。何より」坂口は口の端で笑った。「話を聞いているだけで、イメージが頭からあふれそうだ」

「うわー、そりゃ凄い」

田尻は目を瞬かせた。

そのとき、視聴覚教室の扉を叩くものがあつた。ノックだと気づくのに田尻には少し時間を使った。

「はいはい、何でしょ？」

田尻は立ち上がり答えながらドアを開けた。そこにいたのは小柄な一年生だった。少なくとも学年は上履きの色からわかる。

「ゲーム作っているって聞いて、その……」

「入会希望者！」田尻はそそくさと一年生を招きいれてどこぞから引き出した椅子に座らせた。「何ができる？」

「まだ何もできないけど、ゲーム作ってみたいなって」

「ぜんぜんオツケー」田尻は中村のほうを見た。中村はうなずく。「ついこの間まで僕たち

も知らなかったし」

「それで……」

そこまで言いかけたところで再び開け放したドアを叩く音が部屋の中に響いた。

「はいはい、もしかして入会希望？」

「ああ。経験はないけど……」

「ああもうぜんぜん大丈夫。もう何人でも来て」

☆

「プログラムなんか何人もで作っても大丈夫？」

「何とかなる。と、思う。ただ、今のバックアップ方法は変えたほうがいいな。qqというのを使わないとならないらしい」

「ぎっと。難しいの？」

「いや、何とかなりそうだ。ただ、今後はバックアップはサーバー側だね」

☆

「ここ、こんな感じの仕様でいいんですか？」

「もうぜんぜん大丈夫。いいじゃん、いいじゃん」

「いや、仕様はともかく実現が大変すぎる。グラフィック側での作業量が増える」

「グラフィッカー足りない？」

「もうちょっと欲しい」

「……あの、こつてゲーム製作同好会って聞いたんですが」

「やあいいところに来た。君、絵はかける？」

「え？ いやまあ、ちよつとは」
「一緒にやろうよ」

☆

「増えたねー」

ある日の放課後。活動を見に来た顧問の横井が騒いでいる部屋を見て言った。律儀に田尻は答える。

「今は十人です。まだまだ増えそうな感じですよ」

「飽きないで遊びに来るのはえらいわねえ」

「別に遊びで作ってるわけじゃ」田尻はあわてて言った。「まじめに製作してます」

「田尻さん、ここどうすればいいですか？」

グラフィック担当の男子生徒が田尻を呼んだ。田尻は立ち上がってパソコンの脇へと移動した。

「ところでさ、何で僕だけ『さん』付けなわけ？」

「いやほら、最初からいた五人と僕たちはやっぱり結構違うというか……」

「あ、中村とかもそうなのね」

「それより、この仕様なんですけど」

横井は肩をすくめた。田尻は男子生徒の質問に丁寧に答えていく。

「ちよつと待って、それだとプログラムの仕様と合わない」

プログラム担当としてちよつかり中村の隣を指定席として得た女子生徒が田尻の説明に異を唱えた。田尻は頭をかいた。

「ええと、こうだったら楽しいかな、なんて」田尻は女子生徒と飛び越えてその奥にいる中村に助けを求めた。「どうしよう？」

「そうだな」中村はソースコードを見ながら眉をひそめた。「今ならまだ間に合う。田尻に合わせよう」

「中村さん！」

女生徒が叫ぶのも気にせず中村は田尻に言った。

「ただ、今後仕様を変更するときには実装に打診してからにしてくれ。二度手間になってしまうこともある」

「そうだね。うん。面白くしようと思ってたんだけど」

☆

「エンカウントってシンボル？ ランダム？」

「シンボルでいいんじゃないかな。下手に避けまくってるとはまるくらいの気分で」

「あいかわらず田尻はユーザーに選択を強いるゲームにしがちだよな」

「えー、選択し無いゲームってゲームじゃない？」

☆

「ちよつと田尻君、いい？」

「はい……まだ何かあるんですか？」

「どうしたの？ この間から」

「ううん、気にしないで、良くあること、良くあること。」

☆

「ポリゴンと真島の絵がずれてる理由判った!」

「ん?」

「真島、無意識にパスゆがめてる。見せたいところを強調するように」

「できる?」

「大丈夫。仕組みさえ判れば作るのは難しくない。真島の絵に勝てるように作るよ」

☆

「田尻さん、こっちのほうが面白くありません?」

企画補佐として田尻の仕様を文書に起こしていた一年生(当然後輩ではないのだが、結局「さん」付けは治らなかつた)が画面に書いた仕様案のイラストを指した。

「あ、いいね。それいただき。そのまま使おう」

「待ってよ。それ、全部のキャラでやるの? そんなモーション作ってないよ」

「そっか。じゃ、作るって方向で。いい?」

真島は仕様案を睨みつけた。ように見えるだけで実際には単に考え事をしていただけということは田尻は既に承知している。

「作るならあと二人くらい人が欲しい」

「真島増えない?」

「増えない。どこかから連れてこないと」

「じゃ、言い出しっぺって事で君モーションの手伝いね」

田尻が軽くいいだした一年生に指示する。一応ツールの使い方ぐらいは全員把握している。

坂口はそのやりとりをじっと睨みつけていた。こちらは本当に睨んでいるらしい。
「……どうしたの？ 坂口」

あまりのオーラにおそろおそろ田尻は振り返ってへの字口の坂口に声をかけた。

「いいのか、それで」

「えー、なんかまずい？」

「仕様を変更するのはいい」坂口は絞り出すように答えた。「ただ、そんな安易に決めていいのか？ お前には軸はないのか？」

「軸？」

「譲れない一線。揺るがない何かだ」

「えー」

田尻は口を開けたまま答えあぐねていた。

「クリエイターなら作る意志があるだろう？」

「いやま、僕は面白い方がいいかなーって」

「そこじゃない。船頭多くして船山に登るといふ諺を知らないか？」

「あー、そう。うん、そうね」

田尻は頭をかいた。

「大丈夫大丈夫。面白い方を選んでいこうよ」

その言葉を聞いた坂口はそれ以上口を開かなかった。あくまでとりあえず口をつぐんだだけだった。

田尻は仕様書の更新とデータの責任者の任命をして坂口の黒いオーラを見なかったこと

にした。

☆

「田尻さん、こっちの方がいいですよ」

「お、いいじゃん。中村、これ出来る？」

「出来るけど……いいの？ だいぶ整合性取らないとならないぞ」

「整合性はあとから何とかするよ」

「……」

☆

「主人公喋っちゃまずいよね」

「別にいいんじゃないのか？ ここまでキャラが立ってるんだし」

「どっちでもいい」

「じゃ、喋らない方向で。どうしてもって時だけちよっと喋ろう」

「おい、シナリオ大幅書き直しになる。少しは考えろ」

「でも、主人公ってプレイヤーだよ。喋らない方が絶対いいよ」

☆

「田尻君、やっぱり生徒会が問題にしたがって……」

「先生！ そーゆーのは外で」

「あらごめんなさい」

☆

「グラフィックチームからどうしてもやりたいたいことが出てる」

「時間あるの？」

「ん。多分大丈夫」

「中村は？」

「これなら……ほとんど工数変わらない。でも、いいのか？」

「いいっていいって」

「……」

☆

「田尻！」αマイルストーンまでまだ少し余裕があるある日、坂口は叫んだ。「このゲームはどこに向かってるんだ！」

田尻は目を瞬いた。

「え？ 日本風RPGになるよ」

「そうじゃない！ どうしてこんなに仕様変更が多いんだ！」

視聴覚教室には既に十五人の会員が集まっている。教室的には余裕はあるが、元の三倍にふくれあがったと言える。

「いつもこうなのか？」

「いや、こんなの初めて。いやー、人が多いと発見多いよねー」

「田尻のそれは発見じゃない。ただの思いつきだ」

坂口はぼっさりと切った。

「大体間に合うのか？」

「スケジュール的には大丈夫、だよね？」

「今のところはな」「ん」「私のパートは仕様変更にあんまり影響受けないから」

中村、真島、小沢は答えた。中村はチーフプログラマーに、真島はチーフグラフィックデザイナーとして新入会員に指示を与えるのも仕事のひとつだったが、自分の作業も進めていた。

「でも、この先も間に合うとは限らない」坂口は無然とした表情で言った。「迷走したプロジェクトが完了を迎えることは少ない」

それは坂口の経験に裏打ちされた言葉だった。坂口もたくさんの作品を作っていたが、それは山のような挫折の上に生まれたものだった。坂口には田尻が挫折へとまっしぐらに進んでいるように見える。

「お前は何がしたい？ このだらだらした日常を続けていくのがお前のためになるのか？」

「その言い方はないでしょ！」

小沢は坂口に反論した。毎日の管理は自分ではしているつもりだ。

「こんなディレクションで大丈夫か、と聞いている」

「一番いい方法だと思うんだけどな」

「いや、だめだ。揺らいだものは迷いが作品に出る。その上完成しない」

坂口は断言した。

「中村も中村だ。こんな奴に何故ついて行く。お前はこんな小さな世界で満足するつもりなのか？ 家計を助けるアルバイトをわざわざ蹴ってまで同好会に入れ込む理由など無いはずだ」

「家庭の事情なんかどうだっていいだろ！」珍しく中村は激昂した。「俺はやりたいからプログラムを組んでるんだ。俺がいないとプログラムチームは空中分解する」

「真島も真島だ。何故素直に漫画にしない。こんな奴について行くと世に出ないゲームのグラフィックで終わるぞ」

「ん！」

真島は坂口を睨みつけた。

「俺は、素晴らしい作品が欲しいんだ！このやり方が作品に繋がるとは思えない。煽っているだけだ。思いつきがゲームをおもしろい物にするだ？寝言も大概にしろ。思いつきは思いつき以上のものじゃない。こんな所にいたって自滅への道だ」

視聴覚教室は緊張に満ちた。

坂口は明確に田尻に向けて焦りをぶつけていた。自分の関わった作品が「世に出ない」恐怖におびえている。

田尻は坂口の言葉に思わず言い返していた。

「坂口だって『こんな所』にいるじゃないか！将来を語るんなら勉強でもしてろよ！」

「俺は『こんな所』で煽っているつもりはない。学歴が有利になる時代はもう終わった。俺には野望があるんだ。野望を邪魔する奴は実力で排除させてもらう」

田尻は頭に来ていた。

「じゃあ、どうするんだよ！」

「田尻！お前を教育してやる！如何に創作が大変な作業か、産みの苦しみがどれだけのものか思い知らせてやる」

「坂口、何様のつもりだよ！」

「創作の先達だ」坂口は言い切った。「創作にどれだけの苦勞があるのかお前達よりずっとよく知っている。明らかに失敗する方法も体で判る。お前達の先には聞かない」

田尻は坂口を睨んだ。お互いそれ以上言葉を交わすこともない。

しばしの時が流れた。

先に折れたのは坂口だった。しかし、怒りはそのままだった。

「考えろ」坂口はシナリオ原稿もそのままに自分の鞆を掴んだ。「頭を冷やしてくる。お前も考える必要がある」

坂口はそれだけ言うと大股に視聴覚教室を出て行った。引き戸の閉まる音が部屋の中に響き渡る。

「田尻！ 気にするな」

中村が田尻を見た。田尻は足元を見ながら何かぶつぶつ言っている。

中村には田尻がどうかしたのかと不安でならなかった。

しばらくのつぶやきがやんだあと、やっと田尻はやっと顔を上げた。

「うん。そうだね」その顔には何か吹っ切れたものがあつた。「坂口の言う通りだ」

「田尻、あれだけ言われて何で怒らないのよ！」

小沢が田尻に詰め寄る。田尻は両手を胸の前に広げて小沢の怒りを押しとどめた。

「いやいや、言われて当然だよ。ノリだけで作ってちゃだめだって、ほんとはちよつと気づいてたんだ」

田尻は不安そうに見ている十四人を見渡した。

「うん、面白いゲームにはする。けど、何でも取り込むのが船を進める方法じゃないよね。船頭多くして船山に登る。うん。判るよ、今なら」

「田尻……」

小沢はそれ以上言おうとしたが言葉にならなかった。

「うん、だめだね。今のままじゃ。変わらなくちゃ」

田尻はきっぱりとそう言った。



水島朱音

Illustration: 正午あきら

あらすじ

澤村葉月は中学校の卒業式の日、片思いの相手・塚本日向に告白する。しかし彼は「一年以内に僕を見つけることができたなら返事を教える」という謎の言葉を残して、その日を境に姿を消してしまったのだった。

塚本日向

飄々として掴みどころがない少年。
地元の分家出身。



澤村葉月

ポジティブでさっぱりとした性格。
日向のことが好き。



優

葉月のバイト先の旅館に宿泊している男性客。
穏和な性格。



宇佐美依織

葉月のバイト仲間。
落ち着いた雰囲気を持つ少女。

第五話

「葉月^{はづき}。二〇五のお客様、お食事終わったみたい」

何度目かの客室との往復を終え、使い終わった食器の山を厨房へと続くエレベーターに乗せたところで、一息つく間もなくそう告げられた。

「うえっ、そっちも？ まだ二〇三の方も片付け終わってないのに……」

「私、もうすぐ二〇一の方が終わるから。先に行つとくわ」

「ごめん、お願い」

旅館の仕事は、夜のピークが二回くる。一回目は、夕食の準備。二回目は、夕食の片付けと布団の準備。

いつもこの時間はバタバタするのが常なのだけれど、今日は二階のフロアを担当する人数が少ないため、なおさらだった。

「あっ、葉月」

布巾を手に二〇三に向かおうとしたところで、ふと呼び止められた。

「何？」

足を止めて振り返ったところで、すっと背後に回られる。

「後ろ、エプロンの紐がほどけかけてる」

そう言って少し背の低い彼女は、エプロンの紐を結び直してくれた。

「ありがと、依織」

礼を言うと、彼女は「どういたしまして」と言う代わりに、少しだけ微笑んでみせた。

澤村葉月の携帯電話に、夏休みにアルバイトをしていた旅館から電話がかかってきたのは、冬休みに入る一週間前のことだった。

人手が足りないからまた来てくれないかというその誘いに、葉月は一も二もなく頷いた。冬休みといっても予定は特になかったし、何より夏休みのバイトは葉月にとって良い経験になっていたからである。

その夏休みのバイト時に仲よくなった女の子、宇佐美依織とまた一緒に仕事ができることを知ったのは、冬休みのバイト初日のことだった。

「あー……っつかれたー……」

その日の仕事を終え、旅館の前に設置されている自販機で冷たい緑茶を購入し、一息つ

く。外は寒かったが、やはり一仕事終えた後は冷たい飲み物が欲しくなる。

「……明日も朝からだしね。帰ってすぐに寝なくちゃ」

「だよー。お風呂入ったら即寝だわ、こりゃ」

堤防に腰かけ、二人でそれぞれの迎えが来るのを待っていた。

冬の夜の浜辺に、人の姿はない。潮風に、疲れた体がどんどん冷やされていくのがわかる。

「さむっ」

身震いすると、「寒いのに冷たいもの飲むから」と依織が小さく笑った。ごもつとも。

そんな風に取り留めもない会話を交わしていると、やがて一台の車が二人の背後に止まった。

「あ、うちの先だったみたい」

そう言って依織は立ち上がり、スカートについた砂を軽く払う。

その車は、葉月ももう何度か見たことがあった。こうして依織と一緒に迎えの車を待つことは、夏休みのバイトの時から何度もあったから。

「それじゃ、また明日ね」

軽やかに跳ねて堤防から下りた依織は、そう言って軽く片手を振った。

「うん。バイバイ」

葉月は手を振り返し、車に向かう依織の背中を見送る。

彼女が助手席のドアを開けると、一瞬だけ車内灯がともる。そしてドアが閉じられると、その明かりはすぐに消えた。

(……うーん……)

走り去る車を見つめながら、葉月はぷらぷらと足を揺らす。

(気のせいかなあ……)

海に視線を戻し、首をかしげる。

(やっぱり、どっかで見たことある気がするんだよね……)

一瞬だけともった車内灯。その明かりで見えた、運転席の女性。

初めて見たときにも思った。

(気のせいかな?)

依織に尋ねると、お母さんだと返ってきた。葉月も、そうだろうと思っていたけれど。でも、それなら、葉月は依織の母親と、どこで会ったのだろう。依織に出会う以前に。

(……まあ、他人の空似かもしれないし)

会ったとしても、ほんの一瞬だけだったのかもしれないし。

深く考える必要はない、とうなずいたところで、車の近づいてくる音がしてふり向いた。葉月の家の車が、こちらに向かってくるのが見えた。

そろそろ、年の瀬を迎えようとしていた。

ひどく急ぎ足に、時が過ぎていく。

(……早かったなあ)

ベッドに転がり、携帯電話の画面をぼんやりと見つめながら、そう思った。

中学校を卒業してから、まだ一年も経っていない。あの卒業式の日の出来事を、まだ、昨日のこのように思い出せるのに。目を閉じる。

セーラー服を着た、今よりほんの少しだけ幼い自分。そして『彼』。別れの日。

鮮明に脳内に浮かび上がった残像。夢から覚めるように、ゆっくりと瞼を持ち上げた。葉月は一人、心に誓ったのだ。タイムリミットが訪れるその時まで、諦めない。

その時が来るまで、中途半端なこの想いにまだケリをつけないことを、誓ったのだ。

「……はー……」

音を出して、大きくため息を吐く。

誓ったとはいえ、手がかりがまるでないのだ。『彼』は、それはそれは綺麗に消息を絶ててしまった。

まるで、逃げるように。

(……どこにいるの)

元気にしているのだろうか。

(……なんで、いなくなったの)

何を考えているのだろうか。

(……なんで……)

どうして、かくれんぼを始めたのだろうか。

翌日、いつも通りに朝の業務を終え、一旦家に帰り、夕方からまた出勤した。

女将から、洗濯物がまだ干しっぱなしだから中に入れてくれと言われ、従業員用の出入口から外に出る。

道路側からはちょうど車で隠れて見えないような位置に、洗濯物は干されていた。左腕に、真っ白なタオルを次々と重ねていく。

全て物干し竿から外し終えると、その洗濯物を両腕に抱え直して、再び旅館の中に入ろうとした。

その時、車と建物の僅かな隙間から、男の人の姿が見えた。

ふと目に留まったのは、彼が旅館を見上げて立ち尽くしていたからだ。

（お客さん……かな？）

手には小さめのポストンバッグが提げられている。そして反対の手には何やら紙を持っており、時折その紙を見ては周囲にきよろきよろと視線を走らせていた。

どうも様子が気になって、葉月は一旦洗濯物の中に入れてから、その男の人のところへと駆け寄っていった。

「あの……」

突然声をかけられ、男の人は眼鏡の奥の目を丸くしてふり返る。

「何か、お探しですか……？」

葉月が尋ねると、彼は数回瞬きをしてから、安心したように微笑んだ。

「ひょっとして、こここの従業員さんかな……？」

「あ、はい。そうです」

「ここって、『華潮』って旅館で合ってる？」

手にしていた紙は、どうやら地図だったようだ。

やっぱりお客さんだったか、と葉月は男の人に頷いてみせた。すると、彼は先ほどよりも深い笑顔を浮かべ、

「良かった。こっちの方はあんまり来たことないから、迷っちゃって」と少し照れくさそうに言った。

彼を部屋に案内する間、葉月はどうやってここまで来たのかを尋ね、そして驚いた。なんと、駅から歩いてきたというのだ。

「えっ、でも、駅から行ってすっごい遠いですよね？ バス出てなかったんですか？」

「いやいや。ちよっと久々の帰省だから、ゆっくり歩きたいなーと思って」

部屋まで案内すると、彼は「良い部屋だね」と言っただけで中に入り、窓を開けた。そこから見える海に、僅かに目を細めたようだった。

「何日ほど滞在されるんですか？」

「一週間ほど。よろしくね」

振り返ってにっこりと笑った彼に、葉月も自然と笑みを返していた。

部屋を出た後に、あれ、と思う。

彼は「久々の帰省」と言っていた。年末年始が近いため、それは別におかしなことではない。

(……なんで、家に帰らないんだろう……)

帰省というからには、実家があるはずだ。それなのに、旅館に一週間も滞在するのは、何故なのか。

少し引っかけかりを覚えたが、複雑な事情があるのかもしれないと、葉月はそれ以上考えるのをやめた。

翌日の朝のことだった。

その日も眠い目をこすりながらいつものように出勤し、大広間で朝食の準備を整えた。それが終わると従業員全員で朝食をとり、客が朝食を食べている間にそれぞれの客室を回り、布団を片付けるという段取りになっている。

葉月は一足早く食べ終え、担当フロアである二階に上がった。

と、そこで反対に二階から下りてきた一人の客に鉢合わせる。見覚えのある顔は、昨日の夕方に葉月が出迎えた男性だった。

「おはようございます」

声をかけると、彼もこちらに気付いて柔和な笑みを浮かべる。

「おはよう。朝食って、下の大広間でいいんだよね？」

「あ、はい。もう皆さん、食べ始めてますよ」

「あはは、ちよつと寝坊しちゃって」

そう言っただけで照れくさそうに頭を掻いた姿を見て、何故だか少し、似ているなど感じた。

(柔らかい、雰囲気)

そこまで考えたところで、背後から声をかけられた。

「葉月？ どうし……」

声を聞いて、すぐに依織だとわかった。彼女も朝食を食べ終えて、客室を片付けるために二階に向かってきたようだ。

葉月が階段で足を止めていたことを不思議に思ったのだろう。何でもない、と言おうとして振り返り、そして驚いた。

いや、驚いていたのは依織の方だった。

「……依織？」

彼女は葉月を、正確にはその数段上に立つ男性客を見て、目を大きく見張っていた。

(……え？)

その反応に、葉月は思わず依織と男性を交互に見る。

「……依織ちゃん？」

やがて、きょとんとしていた男性の方が口を開いた。

その親しげな呼び名に、葉月は確信する。

「……お知り合い、ですか？」

男性に尋ねると、彼は依織から葉月に視線を移し、にっこりと微笑んだ。

「従兄妹なんだ」

いところ、と葉月が頭の中で反芻していると、彼は階段をゆっくりと下りていき、依織の目の前に立つ。

「ここでバイトしてたなんて、知らなかったよ」

「……お久しぶりです、優さん」
ん、と小さな違和感を覚える。

優という男性は、依織に対して親しげに話しかけている。けれど、依織は彼と目を合わせようとしなかった。どこか気まずげに、少し目を逸らしている。

「……優さんの方こそ、帰省してたなんて、知りませんでした」

「まあ、年末年始だからね。会社も休みになるし」

「そう、ですよね……」

そう言っつて、僅かに唇を噛み締めると、

「すみません、私、仕事があるんで」

と頭を下げてから、葉月の横をすり抜けて階段を上り、二階へと行ってしまった。

呆気にとられて、その後ろ姿を見送る。

「……どうしたんだろう」

不思議そうな声が聞こえて、優の方を振り返る。彼も、依織のよそよそしい態度に首を

傾げているようだった。

「……何か、あつたんですか？」

不躰かもしれないと思いつつも、気になって尋ねてしまった。

けれど優は、指で眼鏡の位置を調節しながら「うーん」と唸る。

「前に会った時は、普通だったんだけどなあ……」

「……久しぶりに会ったから、緊張してるだけかも」

思わずそんな、よくわからないフオーローを入れてしまったが、優は「だといいな」と笑い返すと、今度こそ大広間に向かって歩いていった。

優という男性については、日が経つにつれて徐々に色々なことがわかってきた。

特に探りを入れたわけではないのだが、彼が穏やかで親しみやすい性格だったこともあり、顔を合わせる度に雑談することが増えていった。その中で、彼自身について少しずつ教えてくれたのだ。

「……それにしても、荷物少ないんですね」

夕飯の準備をしながら、ふと気になってそんな風に声をかけた。優は葉月の言葉につられるように、テレビの方に向けていた視線を、自分の荷物へと移した。

「そうかな？」

そこには小さめのポストンバッグがひとつ置かれている。

「男の人って、みんなこんなものじゃない？ 女の方は荷物が多いって言うけど……」
「あー……確かにそれもあるかもしれませんがね」

旅行に行く時の自分の荷物を思い出し、葉月は苦笑した。それから、あることに気がついて「あ、そっか」と声を上げた。

「実家の方にちよくちよく顔を出されてますしね。服とかも、必要となったら実家から取ってくるのができますもんね」

葉月がそう言うと、優は「なるほど」というように頷いた。

「ああ、そうだね。そのせいだと思う。実は服もあまり持ってきてないんだ」

彼が旅館に来た当初は、わざわざ宿を取るぐらいなので、よほど実家に帰りたくない事情でもあるのかと思っていた。

しかし昼間に出かけている間に、どうやらちよくちよく実家にも赴いているようなのだ。

「やっぱり、年末年始には毎年帰省されてるんですか？」

「うん。ただ、今までは基本的に大晦日と正月だけだったんだ。親戚が入れ代わり立ち代わりでやってくるから……やっぱりその二日間ぐらいは顔を出さないと、世間体が悪くてね」

そう言って、優は苦笑した。

その様子と彼の言葉に、葉月は悟る。

(……やっぱり、あんまり実家が好きじゃない、って感じなのかな)

優の言い方からすると、どうやら仕方なく顔を出している、といった様子だった。そし

て同時に、帰省と言いながらわざわざ宿をとった理由にも納得がいった。

「今回は、実は帰省はついでなんだ。本当の用事は他にあつてね」

「ああ、だから長めに滞在されてるんですね」

葉月が相槌を打つと、「そういうこと」と優は頷く。

「その用事は実家とは関係ないことだから……本当は、あつちに頻繁に顔を出す必要もないんだけど。でも戻ってきてるのは知られてるから、やっぱりさ。「帰ってきてるなら顔ぐらい見せろ」って言われちゃうんだよね」

そうやって優は苦笑する。

葉月は、優の事情を詳しくは知らないのに、なんとなく言ったらいいのかわからない。ただ困ったような表情を浮かべて、

「……複雑なんですね」

とありがちな言葉を返すことしかできなかった。

それから数日が経ち、大晦日の朝となっていた。

その日も、葉月はいつもと変わらず出勤していた。「大晦日か正月に出てくれたらお給料ちよっと上げちゃうよ」という女将の言葉に釣られたのもある。そして何より、女将がそう言うということは、やはり大晦日や正月は人手が足りないのだろうと思っただからだ。

他の従業員は家庭を持っている年配の女性が多い。年末年始は忙しくて当然だろう。そ

の分、葉月にはまだ出勤できる余裕があった。

「葉月ちゃん、これもついでに持ってって」

「あ、ハイ」

朝食の時間が終わり、片付けのために大広間と調理場を歩き来している最中のことだった。玄関に向かう男性客をふと目に止め、葉月は声をかけた。

「優さん、今日は早いですね」

朝が弱いのか、いつもは割とゆっくりと行動している優だったが、この日はもうきっちりと出かける格好をしていた。

葉月の声に気が付き、優は振り返っていつもの柔らかい笑みを浮かべる。

「今日と明日は、実家も忙しいだろうからね。早めに顔出さない」と

「あ、そっか。そうですよね」

数日前に聞いた、優の実家に関する話を思い出して、葉月は頷いた。

「それじゃ、行ってきます」

「はい。お気をつけて」

荷物をほとんど持たないまま、優は旅館を出ていく。

その後ろ姿を見送った後、葉月は仕事に戻っていった。

それを見つけたのは、ほとんどの客がチェックアウトを終え、無人になった部屋を葉月

たち従業員が掃除して回っている時だった。

葉月が入ったのは、無人でありながらも荷物の残された部屋。

優の泊まっている部屋だ。

小さなポストンバッグが置かれているが、部屋は綺麗に片付いていた。優が泊まるようになってから何度かこの部屋を掃除したが、散らかっているところは見たことがない。

だが、その日は見慣れないものがテーブルの上に置き去りにされていた。

「なんだろう？」

プラスチックのカードケースに、青い紐のようなものがついている。最初に目に飛び込んできたのは、優の顔写真。その横に書かれた企業名に、「社員証だ」と理解する。

だが、それを理解するよりも早く、葉月の目に飛び込んできた文字があった。

「塚本」。

優という名前の左側には、確かにその文字が綴られている。

「塚本優」。

それが、彼のフルネームということだ。

(塚本……って……)

この辺り一帯の地主である旧家には、いくつも分家が存在しているという。そんなに近い血縁でない可能性もある。

それでも。

ただ待っていることなど、できなかつた。

今日は大晦日。実家に親戚が集まると言っていたし、優が旅館に戻ってくるのも、遅い時間になるかもしれない。

優の実家がどこにあるのかはわからない。

けれど、じつとしているのは嫌だった。

「それじゃあ、また夕方に！」

そう告げると同時に、旅館を飛び出した。

太陽は真上に昇っている。タイムリミットは、夕方の仕事が始まるまで。

(……家がわからないって言っても、日向みたいに姿を隠してるわけじゃないから……)

以前、日向を探しに聞き込みをして回った時、彼を知る人物には出会えたのだ。優が日向のように、周囲の人間に対して「口止め」をしていない限り、見つけるのはそこまで難しくないように思えた。

よし、と自身に気合を入れて、足を踏み出そうとした時だった。

「……葉月？」

背後からの声に振り返ると、私服に着替えた依織が小さく首をかしげてこちらを見つめていた。

「あ、依織ももう帰るところ？」

「そうだけど……急いで飛び出していったみたいだから、何かあったのかと思って」
細い眉を怪訝そうに寄せた依織に、苦笑を返す。

「うん、ちょっと……人を探しに……」
言いかけたところで、はたと気づく。

「……あーっ！」

思わず大きな声を出してしまったために、依織がびくりと肩を揺らした。けれど、今の葉月に彼女を気にかける余裕はなかった。

どうして気づかなかったのだろう。手がかりは、こんなに身近にあったというのに。

葉月は依織との距離を縮めると、詰め寄るように顔を近づけた。

「……依織、優さんの実家がどこにあるか、知ってる？」

そう。彼女と優は、従兄妹だと言っていた。

血縁関係にあるならば、お互いの家の位置を把握している可能性は、非常に高かった。

(もっと早く気づけばよかった……！)

自分の迂闊さに葉月が内心落ち込んでいる間に、依織はなぜか苦いものを噛んだように表情を歪め、そっと視線を逸らした。

「……知ってるわ」

対照的に、葉月は表情を輝かせた。

これで優に会いにいける。彼が日向のことを知っているとは限らないが、間違いなく答えには近づいたはずだ。

(……あれ？)

と、そこまで考えて葉月の思考は停止した。

(あれ……ちょっと待って)

目の前で、気まずそうにうつむいている依織を見つめる。

彼女は、優の従妹だという。そして優は、塚本家の人間である。

それはつまり？

「……依織」

名前を呼ぶと、俯けられていた視線がゆるゆると上がり、葉月の顔を正面から捉えた。

「あなたも、塚本家の人間なの……？」

その問いかけに、依織はすぐには答えなかった。再び葉月から視線をそらすと、大きくため息を吐く。

何かを、諦めたように。

「……違うわ」

一言、依織はそう返した。その返答に、納得と疑念が入り混じる。

確かに、彼女の苗字は『宇佐美』であって、『塚本』ではない。けれど、違うというのならば先ほどの依織の反応は、妙だった。

葉月が何も言えずにいると、依織は言葉を続けた。

「でも、私には塚本の血も流れてる」

「……どうということ？」

「母が塚本家の人間なの。でも結婚すると同時に家を出たから、今では塚本との繋がりは薄いわ。もともと母は実家があまり好きでなかったみたいだから、結婚を機に離れることにしてみたみたい」

依織の説明を聞いて、ようやく合点がいった。塚本の血は流れているけれど、塚本家の

人間ではない。そういうことだったのだ。

けれど、葉月は新たな引っ掛かりを覚えた。

「母、って……」

葉月は、依織の母親に見覚えがあるのだ。その彼女が塚本の出身だというなら、葉月は一体どこで見かけたというのだろうか？

疑問に頭を捻った、ちょうどその時だった。車のエンジン音と、タイヤが砂利を踏む音が近づいてきたのは。

葉月と依織が振り返ると、見覚えのある一台の車が、ゆっくりとした速度でこちらに向かってきていた。

それを運転していたのは。

「……ああ」

無意識に、吐息のような声がこぼれ落ちた。

鮮明に思い出した。ずっと、見覚えがあると思っていた、依織の母親。

以前、彼女をどこで見かけたのか。

（あの時だ……）

初夏。

親友の萌々^{もも}と喧嘩し、一人で日向の手がかりを探して歩き回っていた、あの時。

一軒の家で、彼を知るといふ女性に出会った。

それが、依織の母親だったのだ。

「……知ってるの？」

何から尋ねたらいいのかわからなくて、けれど考えるよりも先に、そんな言葉が滑り落ちていた。依織は車の方に向けていた視線を、葉月に戻した。

そして、ゆっくりと頷く。それは、葉月が何も説明しなくても、すべてを知っているということの答えだった。

頭が真っ白になる。

葉月が動けずにいると、依織は車に駆け寄り、母親と短く会話を交わした。そして依織が葉月のもとへ駆け戻ってくるのと同時に、車は彼女を乗せないまま走りだした。

少し外して欲しいだとか、そういうことを告げたのだろう。

依織が戻ってきてても、葉月はまだ混乱したまま、うまく次の言葉を吐き出せずにいた。考えて考えて、その間、依織はずっと待っていてくれた。

「……依織のお母さんは、日向と親戚だって言ってた」

ようやく口にしたそれに、依織は「そう」と頷いて答える。

「私と日向は、従姉弟の関係にあたるの。……優さんのお父さんと、私の母、それから日向のお父さんが、三人兄妹なのよ」

「……つまり、優さんと依織と日向は、従兄妹の関係にあたると……」

「そういうことね」

依織の母親は実家あまり好きではなかったが、兄弟仲は良かったらしい。だから家を離れた後も、三家の交流はあったのだと。依織はそう説明してくれた。

「じゃあ、日向や優さんとは、仲いいんだ？」

「……そうね」

それなのに、久々に会った優に対してどこかぎこちなかったのは、何も知らない彼との会話の中で日向の話題が出た時、それを葉月に聞かれる可能性があったからだろう。

依織は、葉月が日向を探していることも知った上で、何も知らないふりを貫き通そうと
していたのだ。

「……ここでバイトを始めたのは？ あたしのことを監視するため？」

「違うわ。それは本当に偶然。あなたの名前を聞くまで、まさか同じバイト先で『葉月』と働くことになるだなんて、思いもしなかった」

先ほどの質問とは異なり、今度の答えはすぐに返ってきた。

嘘をついているとも思えなかった。すべてを知っていると答えた彼女が、今更嘘をつく必要もないだろう。

ならば、と葉月は一度、自身を落ち着けるために深呼吸をした。冬の海の、冷たい風がゆっくりと肺をめぐる。

そうしてから、葉月はようやく、一番知りたいたいことを尋ねるために、唇を開いた。

「日向がどこにいるか、知ってるの？」

依織の表情は凜いでいた。葉月を見据え、彼女ははっきりと首を縦に振る。

「知ってるわ」

たどり着いた。

ようやく核心に迫ったのだと、葉月は思った。だが、これですべてが解決したわけではない。
ない。

葉月は一度、依織の母親に「口止めされている」ということで、彼に関する情報提供を

断られているのだ。

もしかしたら依織からも、これ以上の情報を聞き出すことはできないかもしれない。しかし彼女は、そんな葉月の不安も見抜いていたようだった。

「心配しなくても、あの子の居場所を隠すようなことなんてしないわ」
「え？」

あっさりとそう言われると、逆に拍子抜けしてしまった。

「だって私、しょっちゅう日向に会いに行ってるもの。尾行なり何なりすれば、すぐに彼の居場所なんて判るわよ」

「あ……」

なるほど、尾行。

その方法は思いつかなかった。

「それに……」

依織はぼつりと言葉を続け、海の彼方へ視線をやった。遠い目で、寒々とした冬の海を見つめている。

「私が……あなたと日向を会わせたい、っていうのもあるわね。彼にしたら、それは本意ではないのかもしれないけど」

本意ではない。

「……あたしには会いたくないってこと？」

尋ね返した声には、自分で思っていたよりも不安が滲んでいた。その色聞き取ったのか、依織は海風になびいて顔にかかる髪を払いながら、葉月の方に視線を戻す。

「……それは、本人に直接聞いてみるといいわ」

その答えに何も返せない葉月を横目に、依織はポケットから携帯電話を取り出し、誰かに手早くメールを打つ。

そうしてから、有無を言わさぬ声音で告げる。

「正月明け。日向に会いに行きましょう」

『クローバー』 入江棗

ある日突然千伽の隣に楓が入り込んできたことで、千伽の幼なじみである孝士も巻き込み三人の関係は変化していく。万引き事件や東京観光という出来ごとを通して深まる友情はやがてそれ以上の想い生む。真っ直ぐに向けられる彼らの想いに答えが出せず、三人の関係は時間が止まっていた。そんな中で迫られる進路と焦り、そして変わりたいという千伽の想いが、勇気となって描かれる。店番中千伽の家の書店に押し入った強盗から助けられた千伽は、そこで感じたある恐怖で、楓と孝士に対する決定的な想いの違いに気付く。千伽がどのように二人の想いに向き合っていくのか見守っていたきたい。

『やろうぜ!』 土本強

障害にぶつかりながらも、必要な能力や仲間を加えながら進化する『ゲーム制作同好会』。田尻すなお、中村ひかるのほか、真島まこ、小沢すみこというメンバーが揃いクオリティー面でも成長する彼らのゲームに、「物語が足りない!」と告げる坂口ゆうたの登場で、今回も試行錯誤しながらゲーム制作に取り組む姿が描かれる。坂口の見せた自主制作映画に感銘を受けた四人は、坂口を新たなメンバーに迎え物語を組み込んだゲーム作りを開始。しかし、ゲームを良くしたいという田尻のゲーム制作への姿勢に疑問を持った坂口は想いを突きつける。物語が加わったとき、どのようなゲームに進化するのか。そして、田尻の作ろうとするゲームはどのようなものか、ゲームの完成が楽しみだ。

『平行線シンドローム』 水島朱音

近くにいろははずなのに中々手がかりが掴めないまま、姿を消した日向との「かくれんぼ」は冬を迎えていた。夏休みを過ごした旅館からの連絡で、「再び旅館『華潮』でバイトを始めた葉月は同じバイト仲間、宇佐美依織と再会する。慌ただしい旅館での日々を送る葉月は、一人の男性客優に出会った。実は従兄弟だという優によそよそしい態度をとる依織とは裏腹に、会話の回数も増していく葉月は、偶然優の素性を知ってしまう。今回の話で葉月は日向へ繋がるための大きな鍵を手に入れる。日向の居場所と・かくれんぼ・の真実に大きく近づきながらも、まだ謎の多い日向、依織、優の関係。どう日向のもとへ導かれ、再会したとき葉月がどのような態度を見せるのか？ 最後まで目が離せない。

2012年 11月7日 発行

著 者 入江 暲 / 土本 強 / 水島 朱音

企画・監修 榎本 秋

発行所 株式会社榎本事務所
〒178-0062
東京都練馬区大泉町 2-54-8 SELLY 加計呂麻 402
電話 03-6750-6341

表 紙 神内みさと (AMG 出版工房)
イラスト 井上真紀子、ヒトエ、伊藤由希、U35、正午あきる
(すべて AMG 出版工房)

協 力 脇 功一、三浦奈緒
(アミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科)

本マガジンの配布、複製は不許可とする。

2012年 11月7日 発行

著 者 入江棗／土本強／水島朱音

企画・監修 榎本秋

発行所 株式会社榎本事務所
〒178-0062
東京都練馬区大泉町 2-54-8 SELLY 加計呂麻 402
電話 03-6750-6341

表紙 神内みさと（AMG 出版工房）
イラスト 伊藤由希、U35、正午あきら
（すべて AMG 出版工房）

協力 脇功一、三浦奈緒
（アミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科）

本マガジンの配布、複製は不許可とする。